

泊外人墓地 地図

〔那覇市指定文化財 泊外人墓地〕

- ・面積：2892 m²
- ・指定：1987〔昭和 62〕年 8 月 10 日
- ・墓碑数：386 基

ペリー上陸
記念碑

ファミリーマート

道路

入口

墓碑銘

A

Here Lies
The Body of Rev. Fr.
MATTHEW ADNET
of the Paris Foreign Mission
Society
Apostolic Missionary
Who Died in the Ryukyns
1. July 1848

主よ
永遠の安息を
彼に与え給え

B

W M HARES
ENGLISHMAN
1816

C

WILLIAM BOARD
UNITED STATES
NAVY
DIED 1854

D

乾隆十五年庚午
清故江南蘇州府常熟縣朱三官
七月初八日酉時死

E

康熙五十七年
清故浙江寧波府定〇〇
六月初五日卒享〇〇〇

資料1 中国（清）^{しん} 水軍隊長の王拱^{おうきょう}の場合（1718年死去）

・琉球国より中国（清）^{しん}へ、中国人漂着者について知らせる書

康熙^{こうき}57年（1718）9月

（あらずじ）康熙^{こうき}56（1717）年12月1日、中国浙江省寧波定海鎮^{ニンポー}の沿岸警備隊に所属する軍用船1隻（乗員50名）が出港、中国沿岸を航海中、20日、暴風に見舞われ、碇^{いかり}や舵^{かじ}を失い漂流、その間8名が行方不明、宮古島近海まで流され、沿岸の珊瑚礁^{さんごしょう}に衝突し大破しました。翌年の康熙^{こうき}57（1718）年1月5日、宮古島島民によって42名が救出され、4月19日沖繩本島の泊村^{とまり}の館^{やかた}（漂着者収容施設）に送られ、日用品や食料、衣類などが支給されました。

5月11日、漂着者一行の世話役であった毛新城^{もうあらぐすく}より、この船の隊長である王拱^{おうきょう}が吐血^{とけつ}し、医者^{いしや}の治療を希望したので、すぐに名医を派遣し、毎日医者2名をつけて看病している、との報告がありました。部下たちの証言によると、王拱は昨年6月の頃からすでに吐血^{とけつ}病^{びょう}（壊血病か？）の症状がみられ、今年5月になって再発したものらしい、ということが分かりました。

（特別に）国王の主治医を派遣してもらい、毎日、朝鮮人参^{かんじんじん}を服用するなどの治療をしましたが、その甲斐^{かい}もむなしく、6月5日酉^{とり}の刻（午後6時頃）死亡^{かんおけ}しました。棺桶^{かんおけ}や葬式^{そうしき}に必要な品物^{しなもの}を用意し、泊村西の松林^{まいそう}の中に埋葬^{ぼひょう}し、墓標^{はそん}を建てて、村民たちに管理させました。

残った兵士たち41名は、閏8月10日、中国へ帰すため、琉球の船に乗って順調に那覇港を出港、途中、渡嘉敷島に停泊していたところ、翌日急に暴風が起り、船が港の外に流され、大岩に激突、その衝撃で乗組員達は船外に放り出され、中国人乗組員4名、琉球側の通訳1名・船員1名が溺死^{できし}しました。このたび、破損した船を修理し、生き残った37名の兵士を乗せて福建へ送り届けます。

（『歴代宝案』^{れきだいほうあん} 第2集9巻12号）

*その後、康熙57（1718）年12月1日帰国を果たした、と中国側より報告あり



資料2 中国（清） 船員朱三官の場合（1750年死去）

琉球国王尚敬より中国（清）へ、中国人漂着者を護送することを知らせる書

乾隆15年（1750）11月18日

乾隆14年（1749）11月29日、船一隻が奄美大島に漂着しました。その船主である、瞿張順らは以下のように証言しました。

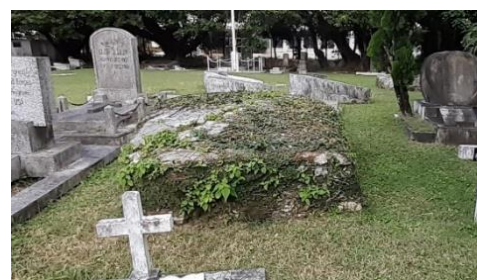
「私たち13名は江南地方蘇州府の商人です。今年11月7日山東を出港しましたが、その航海中、突然、台風に遭い、流されてしまいました。18日には再び出港しましたが、思いがけなくまた暴風に会い、今度は舵を失いマストまで折れてしまいました。29日、奄美大島に漂着し、すぐに地元の役人に船を修理してもらい、米や薪、醤油、野菜、たばこなども支給してもらいました。翌年（乾隆15）2月19日、再び奄美大島を出発しましたが、またまた暴風にあい、21日には奄美諸島の喜界島に漂着しました。船は珊瑚礁に乗り上げ壊れてしまいました。私たちは岸までたどり着くことができ、助かることができました」

すぐに奄美の役人に食料を与え、保護させ、その後、瞿張順ら13名は、かき集められた船の荷物などと一緒に、今年（乾隆15）4月4日、沖縄本島山北の運天地方に送られました。さらに、漂着者をに中山の泊村（現在の那覇市）の漂着者収容施設に送り届けさせ、追加の食料や衣服などの生活用品を与えさせました。

泊村の役人、毛内間らの報告によると、

漂着者のうち、船乗りの朱三官は、今年2月喜界島で吐血病を発病しており、病状がなかなか回復せず、医者の治療を希望しましたので、早速、医者1名を派遣し、毎日診察して治療しましたが、5、6ヶ月経過しても、病は益々重くなるばかりでした。医者は心を尽くして朝鮮人参等の漢方薬も用いましたが、病状は重く、7月8日の酉の刻（午後6時頃）に死亡しました。すぐに、棺桶や葬式に必要な品物を手配し、泊村西浜の松林の中に埋葬し、土を盛って、墓標を建て、村民に管理させました。

（『歴代宝案』第2集31卷29号）



資料4 イギリス軍艦水兵ウィリアム・ハリスの場合 (1816年死去)

長い間、絶望的な状況にあった青年が、ここで亡くなった。その夜、^{ひつぎ}棺は私たちの大工が作り、地元住民は上陸地点の近くの木の下にある小さな^{まいそう}埋葬用の小山にイギリス式に墓を掘った。

翌朝、私たちが驚いたのは、主な住民の多くが^{もふく}喪服を着て、^{そうぎ}葬儀に出席するために待っていたことだ。マックスウェル艦長は、船団の水兵とともに上陸し、^{いたい あんち}遺体の安置してある庭に向かった。水兵たちは^{ひつぎ}棺の後ろに2人ずつ並び、次に^{ちゅうい}中尉、上官、そして最後に艦長が並んだ。この行列の順番を注意深く見ていた住民たちは、順序が逆転していることを、何のヒントも与えられずに^{さつち}察知し、行列が動き出すと、^{ひか}控えめな態度で^{ひつぎ}棺の前に並んで、しずしずと墓まで行進した。^{そうぎ}葬儀が執り行われる間、大勢の人々がいたが、最大限の礼儀と^{せいじやく}静寂が保たれた。

その翌日、島民は墓石を建てる許しを求めに来た。彼らは墓碑の石材の寸法などについて^{さしず あお}指図を仰いだ。^{じゅうぐん}従軍牧師テイラー師が墓碑の銘を考え、墨汁で英文が書かれたが、琉球人は簡単な適具を用いて、見事にこの英文の碑を彫りあげた。

“Here lies buried, Aged Twenty-One Years, William Hares, Seaman, of His Britannic Majesty’s Ship Alceste. Died Oct. 15, 1816 This Monument was erected. By the King and Inhabitants Of this most hospitable Island. ”

(イギリス軍艦アルセスト号の水兵ウィリアム・ハリスここに眠る。1816年10月15日没。享年21。この碑は、この島の極めて親切な国王および住民によって^{こんりゅう}建立された)

この碑が出来上がって墓の上にはめ込まれると、島民らは、その上に供え物を供え、多量の酒を燃やし、琉球の僧侶によっておごそかな式が行われた。式の後の^{そな}供え物は、^{せいげんじ}聖現寺で^{りょうよう}療養中の他の病人たちへ贈られた。

(バジル・ホール大佐「朝鮮西海岸及大琉球島探検航海記」〔1818年〕、軍医ジョン・マクロード「アルセスト号朝鮮・琉球航海記」〔1818年〕より)



資料5 康熙^{こうき}23年（1684）8月の清国^{しんこく}の礼部^{れいぶ}（外務省にあたる）から琉球への通達

この度、これまでの民間の海上貿易禁止令（海禁^{かいきん}）を解除したので、中国各省の多くの民間人が船を出し貿易するようになった。そこで、中国周辺の国々の国王は、それぞれ沿岸の地方官に命じて、もし中国船が漂着した際には、生存者をすみやかに保護して帰国させるようにせよ。



その後の清国と琉球の送還体制システムの基本となった

